

# 「伊勢物語」の授業

## －導入期の古典指導から－

金子直樹

2004年度の高等学校1年生「国語総合」古典分野において、「伊勢物語」の授業を実施した。「伊勢物語」は定番教材であるが、ねらいの当て方や扱い方によって、多様な授業展開が可能な教材でもある。今回は、高等学校1年生前半の古典学習導入期において、「古典」としての独自性よりも「現代」に通じる共時性に焦点を当てて読み進めてゆくことで、今後の古典学習への望ましい態度を形成することを目指した。学習者は、「伊勢物語」の学習を通して、「古典」を「現代」の文化として主体的に読み深めてゆくことができた。

### 1 はじめに－問題の所在－

生徒にとって古典を学ぶということは、なかなかの難行である。古典文法や古語単語を覚える努力をした上で文章を読んでみても、例えば「伊勢物語」に登場する「男」は、何かといえば歌を詠んでは泣いているばかりで、今の高校生にとってはどうしても現実感がない。生徒たちが「なぜ古典を学ぶのか」という根源的な問いを露骨に反語的に表すことはないとしても、「古典を学んでそれで何になるのか」という問題は、むしろ私たち指導者にとってこそ重要である。仮に、吸収力に優れた生徒がいるとして、古典の学習を通して得るものが、「伊勢物語」の「雅な世界」ということでしかなければ、それでは「我が国の文化と伝統に対する関心や理解を深める」ということにさえならないのではないのか。

古典を学習する意義をどこに見出すのかということについては、「現在」に生きる我々が「古典」を学ぶという時間的な隔たりがそこにある以上、永遠の課題でもある。私たちは国語教育の実践のなかでこれまでも様々に答えを出してきたが、社会が加速度的に変化し、価値観の変化や多様化がより一層進むなかであって、常に新たな課題として考え続けなければならない問題であろう。

その際に、古典とは先代から受け取るだけでなく、次代に引き継いでゆくものであるという視点を大切にしたい。例えば「伊勢物語」は、もとより所与のものとして存在していたのではない。かつてある時代状況のなかで人々が作り出したものであり、続いて様々な時代状況のなかでも人々がそれをよしとして受け継いできたものであった。彼らはいったい何を思って「伊勢物語」を作り、また受け継いできたのか、それは現在を生きる生徒たちにとって納得のゆくものであるのだろうか。この点を明らかにしてゆくことを通

して、価値観の変化や多様化のなかで様々な情報があふれている現在、生徒たちが単に受動的な情報の消費者としてではなく、文化の後継者・創造者として主体的に行動してゆくための出発点としたいと考えている。

### 2 単元計画

**単元名：**「伊勢物語」の世界を読む

**対象：**2004年度4年生(高校1年生)5クラス

**時期：**5月末から9月末まで(約15時間配当)

**単元目標：**

①「伊勢物語」を読み、古典に描かれる人間像や世界観を理解する。

②「伊勢物語」が作り出され、受け継がれてきた文化や、人間にとっての「物語る」欲求について考えることを通して、古典の意義について理解する。

③古典文法や古語単語を学習し、古文をより深く読解すると共に、現代語との関わりを通して、言葉の果たす役割について理解する。

**単元の展開と教材：**

**第1部「ある男の物語 その1」**

**教材：**

1段「初冠」、4段「月やあらぬ」、5段「関守」、6段「芥川」、9段「東下り」、10段「たのむの雁」、12段「武蔵野」、14段「桑子」

**目標：**

「伊勢物語」の「男」は、どんな男として、どのように語り伝えられているのかを読み取る。また、それはなぜかを考える。

**留意点：**

①「初冠」を導入にして、以後は一連のいわゆる「業平譚」とされる「伊勢物語」前半の章段を取り上げる。

読解に際しては、各章段でそれぞれ匿名の「男」という書き方になっていることに焦点を当てるとどめ、成立論やモデル論などの「伊勢物語」の背景についてはあえて触れないまま読んでゆく。

②教材としては、本文のみのプリントとともに、口語訳付きの本文プリントも用いて、数多くの章段を読み、比較することが出来るように心がける。

③第1部を終えた時点で、テーマについて「中間まとめ1」として、生徒にレポート(B6版)を書かせる。  
レポート1のテーマ

「伊勢物語」の第1部までを読んで、  
「伊勢物語」の「男」は、どんな男として、どのように語り伝えられているのか。また、それはなぜか。

## 第2部「ある男の物語 その2」

教材：

23段「筒井筒」、24段「梓弓」、45段「螢」、  
60段「花橘」

目標：

「伊勢物語」のそれぞれの章段は、どのように関連しあっているのかを理解する。また、「伊勢物語」の「歌」と「物語」とは、どのような関係になっているのかを考える。

留意点：

①第2次は発展として、第1次の「業平譚」とは直接には結びつかない、別のグループに属する章段を取り上げる。読解に際しては、第1次での「中間まとめ1」(生徒の意見をプリント1枚にまとめたもの)を生徒に還元し、そこから出てきた新たな課題として「物語」の収斂性と拡張性の両面を意識しながら読んでゆく。

②教材としては、部分口語訳付きのプリントも用いて、数多くの章段を読むことが出来るように心がける。

③第2次を終えた時点で、テーマについて「中間まとめ2」として、生徒にレポート(B5版)を書かせる。  
レポート2のテーマ

「伊勢物語」の第2部までを読んで、  
「伊勢物語」の「男」は、どのように語り伝えられているのか。  
「伊勢物語」のそれぞれの章段は、どのように関連しあっているのか。  
「伊勢物語」の「歌」と「物語」とは、どのような関係になっているのか。

## 第3部「実名章段」

教材：

82段「渚の院」、83段「小野の雪」、85段「目離れせぬ雪」

目標：

「伊勢物語」の「作者」は、どんな「物語」を作ろうとしたのかを考える。

留意点：

①第3次はさらなる発展として、第2次までの「男」の物語ではない、いわゆる「実名」章段を取り上げる。読解に際しては、第2次での「中間まとめ2」(生徒の意見をプリント4枚にまとめたもの)を生徒に還元し、作品全体を通して「物語」の構成や「物語る」ことの意味を意識しながら読んでゆく。

②第3次を終えた時点で、テーマについて「最終まとめ」として生徒にレポート(B5版)を書かせる。  
レポート3のテーマ

「伊勢物語」の第3部までを読んで、  
「作者」は何を描こうとしているのか。  
「物語」とは、どういうものであるのか。

## 3 授業の実際—学習記録から—

以下に、学習記録(クラスの中で輪番に、その日の授業の記録を取り、意見や感想をまとめてゆくノート)にある生徒の意見・感想によって、授業の実際を報告する。(下線部は引用者による。)

①「伊勢物語」(古典世界)と現代との差異や共通点について述べたもの

初冠 (5月20日C組、TK)

今日は、歌物語といわれる「歌」と「物語」が合体したジャンルの「伊勢物語」を勉強しました。この初冠の男は、やっと一人前になって恋をしたいと思って、いざ女性の所に行くと、まだ若いのでドキドキしてどうしたらいいのかわからない……。そんな恋のドキドキはわかるような気がしました。ところで、昔の人は歌で愛を伝えるなんて、なんてロマンチックなんだろう。歌を贈られただけで自分のことをすごく想ってくれていることがわかる。けれど逆に、歌が下手な人はたいへんだなあ。なかなか恋ができなくてさみしいだろう。歌がこれほど生活に根づいているということは、昔の人の心はよっぽど豊かであつたに違いない。

私も一度くらいは歌で告白されてみたいなあ(それもひくだろうけれど…)

筒井筒 (6月29日D組、NA)

今回は、今までの話と違い、「男」は一途な人物としてではなく、心変わりをしてしまうどちらかというマイナスのイメージで描かれていました。以前まで学習していた話では、男は善人で一途という比較的理想的な姿で描かれており、それが私にとっては不自然に感じられ、非現実的な世界としての理解、すなわち表面的な理解しか得られていなかった様に思われます。しかし、今回の話では、より人間らしい「男」として、その人物像がプラスかマイナスかは別として納得できる少し現実的な世界が描かれており、比較的分かりやすい話でした。今回の授業で感じたのは、人間の本質はいつの世も変わらないという事です。確かに昔の人々は我々と異なる言語を日常的に使用し、言葉の強調の度合いも今よりかなり強く、我々の理解の領域をこえている部分があるとと言っても過言ではないでしょう。しかし、感情的な面では、我々の感覚とたいして変わらないように思います。そういう意味で「限りなくかなし」という思いは我々を共感させ納得させるのでしよう。一方で「異心ありてかかるにやあらむ」というような感覚も理解できてしまう現代人に対して、「進歩がないなあ」と思ってしまうわけではないのです。

②「伊勢物語」の構成、各章段ごとの関連や、物語の枠組について述べたもの

たのむの雁、武蔵野、桑子 (6月23日E組、TH)

今回は、「伊勢物語」の「東下り」の男の心情を理解するために、前後の章段の関連について学習しました。4、5、6段のように同じような内容を、表現を変えながら何パターンも繰り返していることなど、それぞれを別々に読んだ時にはあまり気に掛けなかったことが、全体を通して見ることで見えてきました。また、「東下り」に登場する男は、「東下り」だけを読んだ時には、自己嫌悪で都を離れようと思いつくまでに深刻になっている男に同情さえ感じられなくても、「たのむの雁」以降を読み進めると、男の自由奔放さが見えてきて、同情して損した気分になりました。この物語を本当に理解しようと思うと、段と段との関連性や他の段の内容が重要になってくると思います。「伊勢物語」を全部読んでみたいと思います。

第1部まとめ (6月24日B組、MN)

今日は、今まで習った所、つまり第一部の物語を整理して、それぞれの関連性や変化などを習った。「伊勢物語」は第〇段という形で構成されていて、一見「民話集」などのように、つながりを持たないお話を羅列して一冊にまとめた作品のように思える。しかし今日の授業で、意外にも読んできた話につながりがあることが見えてきた。例えば、第1段から第9段にかけて、その共通性が3つ見られる。1つめは、男が歌がうまいということ。2つ目は、男はよく泣くこと。そして3つ目は、高貴な女性に一途な男が恋をする、という点である。これらからすると、じゃあ伊勢物語はある特定の男の物語を、それぞれ区切りをつけて書かれたものではないか、と思ってしまう。でもそう考えると話どうしにたくさん矛盾点も見えてくる。とくに9段以降の物語は、急に男がものすごい女たらしになってしまっている。これまでの雰囲気台無しだ。このように物語同士にいろんな共通点やズレがある。それらを考察してみると、「伊勢物語」の意味がだんだん分かってくるのではないだろうか。

#### 4 まとめ—生徒のレポートから—

以下に、生徒が提出したレポートによって、授業の到達点を報告する。(下線部は引用者による。)

①内容面から、「伊勢物語」に描かれた世界、様々な愛情や哀しみのあり方についてまとめたもの

例1：伊勢物語の第1部の印象は、全ての話で「男」が似たような境遇にいるように思えた。だいたいの男達は愛がかないそうもない身分の高い女性に恋をして、そしてはかなく敗れ去って行く。しかも各章段の「男」は全ての物語でつながっている印象を受けた。(中略)第2部の方では変わって、色々な「男」が出てきて色々な場面に遭遇している。僕はこれらを読んで、このような素晴らしい恋もあれば、あのような素晴らしい恋もある、と言われているような気がした。全ての物語が状況が違う「素晴らしい恋大全集」みたいな印象があった。(D組、KJ)

例2：離ればなれの男と女の話が繰り返されている。それによって、それぞれの物語を比較でき、面白くなると思う。そんな物語の中で効果を出しているのが歌で、どの段の歌も、遠くにいる愛する人への気持ちを歌っている。直接伝えられずにたまった想いを歌にして、自分の中で消化しているのではないかなと思う。

そして、その歌が離ればなれの男と女の話さらさら引き立てて、より一層切なさが伝わってくる。結局、男は愛する女、愛していくれる女と一緒にいられない悲しい人物として語られているのだと思う。そして、離ればなれの話を繰り返すことによって、そういった男の悲しい人物像をしっかりと強いものにしてているのだと思う。(C組、KK)

②構成面から、主人公の「男」の造形に注目してまとめたもの

例3：僕は第1部を読んで感想を書いた時、「伊勢物語」の「男」は一人だけではなく、平安時代にいた男の恋愛に対する行動が書かれていると書いた。「伊勢物語」は何段も何段もあって、とても話がいっぱいあるので、一人だけの話ではまずあり得ないと思った。そして今度第2部を読んでも「男」は一人だけではないと思った。「男」のたくさんの恋愛の行動が書かれていたけれど、その行動がたくさんの女に対して違って行って、たった一人でこんな器用なことが出来るわけがないと思った。(中略)「伊勢物語」は、一人の人間の恋愛話ではなく、平安時代にいた、たくさんの「男」の恋愛話の中でとても素晴らしい話を選んで、それを書き残しているんだと思う。(A組、KT)

例4：第1部の「男」は高貴な女を追いかけては失敗し、泣いていた。それぞれの恋にまっすぐで、失敗を嘆く様子から、精神的に幼い人という印象だった。それに対し、第2部の「男」は対照的である。(中略)どの話からも、男はいさぎよく愛し続けた女を諦めたり、自分を愛した女を思いやりやさしく歌ったりなど、男は逆に女から追いかけてられ、それをクールにかわす、とても精神的に強い人だと思った。そのように語られている。この「伊勢物語」の「男」は、筆者が人間の多面性を語るために作り出した仮の人物なのだろうかと思う。だから、それぞれの章段は独立し、違う話、違う男だと言える。しかし一方で、もし男を同一人物だと考えたとすると、筆者は、その男の成長を描きたかったのではないかとも思う。第1部から第2部にかけて、男はたくさんの恋を体験し、教訓を得て、立派な一人の男性へと成長する。そういう、一人の男の記録ではないだろうか。(E組、IK)

③「歌物語」における「歌」と「物語」との相互作用に注目してまとめたもの

例5：「伊勢物語」には様々な男が登場してくる。彼らは時に情熱的であり、悲観的であり、純粋であり、優しさを垣間見せる。そして彼らの豊かな感情から出来上がった歌が物語の中に存在しているのである。歌が物語の中に存在していると書いたが、これまで読んだ「伊勢物語」の話の多くは、それぞれの題名が歌の中に登場している。ここから考えてみると、歌が主役であり、物語はそれを説明するために存在しているのだと言えるのかもしれない。歌は花で、物語はそれを咲かせるための土壌であり、主人公の心情、感情が歌という花の種なのだ。(D組、MM)

例6：さて、伊勢物語は「歌物語」であるように、各段には必ず和歌が入っている。歌によって物語の展開が変わったり、クライマックスで詠まれたりしており、和歌はその物語の主題となっている感情を凝縮して表現し、物語により深みを与えていると思う。逆に、物語が和歌の叙情性をより高めているとも言えるだろう。また、各段の冒頭は「昔、…」となっているが、これは現実の物語だったとしても、そのように描くのではなく、遠い昔の世の物語であるかのように語り、読者を「雅」な世界へと引き込み、さらにはその中で和歌をより趣深くもしているのではないかと思う。全体として、和歌によって物語が見事に叙情的に描きあげられ、それぞれの物語や恋を通して「愛」「やさしさ」「死」など様々なものが描かれ、心に通ってくる、哀愁に満ちた作品であると思う。(E組、YM)

④「伊勢物語」の成立と享受の過程に注目してまとめたもの

例7：以前の「まとめ1」で僕は「この伊勢物語は複数の作者によって綴られたものではないか」と推測した。ところが今回、より深く考察したことで、それは全く逆の、つまり伊勢物語はたった一人の力によって書かれたのだと考えるようになった。似た内容の段があり、しかもそれらは微妙に異なっている。僕はこれらが筆者の後悔に似たものから著されたものだと感じた。つまり、「あそこでああなっていれば」という思いをするような恋を、筆者がたくさんした、ということだ。具体的に言えば、第四段と第五段である。親などの権力と恋い惹かれ合う男女の物語だが、第四段では不幸にも悲しい結末を迎えているが、第五段で

は恋が成就しているのである。筆者が実際に経験したのは第四段のような切ない恋だったのだろう。だからこそ、第五段では男女の恋が叶っているのだ。

(C組YK)

例8：(略)ところで、作者は誰だろうか。実際は不詳なのだが、「まとめ1」を参考に考えてみた。

①作者は女か？ 前述のような社会に批判を食らわせたくて、風刺の意味を込めて作る。この男のような者に振り回された経験があるかも。

②作者は男か？ 順当に前述のような社会を具象化した男に、あるべき姿(少し極端)をとらせている。逆風にも負けず、歌を詠むなど雅を忘れない男…

主人公は明らかに一人ではない(似てるけど)。つまり、これは作者も複数だったのではないか。まず一続きの伊勢物語が書かれ、感化された人々が新しく作って入れてしまった。ばれにくいように、仕組みを似せて。これは大いにあると思う。絶筆の傑作を読んで、続きを書きたくなかったことがないか？ 今のように本があまり出回らない時代、新版伊勢物語を作ることも可能だったかも。「私」の伊勢物語が「我々の」伊勢物語になったことは、多面的な作品になったと歓迎すべきことかもしれない。(C組KY)

### 考察1

この単元では、古典学習の導入期として、古典を読む態度の獲得ということを目指した。その始めとして、古典に描かれている人間像や世界観を理解することは、まずは現代との差異を認識することである。同じ人間が、社会状況や文化の違いによって、現代の我々とは異なる思いを抱き、行動をしているということを、驚きをもって受け止めることである。その驚きが「なぜ？」という問いを生みだし、その問いに自答するなかで、実は時代を経ても変わらない、人間の本質的な部分が明らかになってくるのであろう。生徒が古典を読んで、あるいは違和感を抱き、あるいは共感を抱くのは表裏一体のことである。学習記録やレポート例1、2に現れているように、生徒達は、あるいは時代状況の差を感じながら、あるいは差を乗り越えて「伊勢物語」を読み解こうとしている。

また、「最終まとめ」のレポートには「わずか十五の段しか読んでいないので『伊勢物語』の全体を語ることは難しいけれども」という記述が多く見られた。これは逆に言えば(扱い方に軽重はあっても)プリントで10枚ほどの分量を読んだからこそであって、2、3の章段を細切れで読んでいたのでは出てこない感

想であろう。さらに、授業では扱っていない最後の段まで読み解いた上で、「初冠」に始まって「男」の死に終わる「伊勢物語」全体の構成について言及したのも多く見られた。授業での課題を解決するための手がかりを求めて、自ら「伊勢物語」を読み進めている。

今回の「伊勢物語」の学習を通して、目標①「『伊勢物語』を読み、古典に描かれる人間像や世界観を理解する」ことは、概ね達成できた。

### 考察2

古典を読む際に、さらに重要なことは、古典の「主体化」である。「現代の私達と違ったり同じだったり、いろいろ考えさせてはくれるけれども、所詮はなにか遠い世界の別のもの」という絶望的な距離感を越えて、古典が受け継がれてきた文化の中に自らが存在し、古典を受け継いでゆく文化を自らが作り出しているという「当事者意識」を、少しでも育むことである。現代を生きる生徒達にとって、自らが依って立つ文化としての古典の存在を意識させたい。今回の「伊勢物語」の授業では、直接的には「伊勢物語」の複数の章段を読み比べるという学習活動を通してであるが、

「物語」の構成や成り立ちを考えることから、現代の私達にとっても通じる「物語る」ことの意味について考えさせることまでを目指した。レポート例3から8にあるように、生徒達は、「伊勢物語」の「男」は、特定の人物としての具体的な「男」なのか、時代の代表としての抽象的な「男」像なのかという論点を自ら作り出したり、「伊勢物語」の成り立ちについての仮説を自ら導き出したり、「歌」という表現形式の意味を探ったりしながら、「物語」の意味や現在の自分たちとの関わりについて考えを深めていった。

さらに、「最終まとめ」の段階では次のようなレポートが提出された。

例9：作者の語ろうとしていることは何なのか。私は「伊勢物語」を貫く主題は「美しさの追求」ではないかと思う。第1部、第2部では「恋愛」の美しさを語っている。美しさは悲しみの中にも存在する。また同じ愛でも第1部第2部では場所が違い、第3部に描かれているのは主従愛の美しさだ。色々な「愛」を描くことで多面化され、万人受けする。最高の美しさ、つまり、誰もが、いつの時代に、どこでも理解できるものを求めていたのではないだろうか。「昔」で始まるのは、「今」つまり「書かれた当時」という特定の時を超越したいという気持ちがあったからだろう。主題は「男の一生」ではない。そのため、一般化された主人公が出てくる。「在原業平」などと断定しないのは、その男一人に焦点を当てないためだろう。色々な

男を、実在、非実在を一つにして、多面的で象徴的な「男」を作ったのに、部分的に突出した個性を持たれては困るわけだ。語りたいのは、あくまでも総合的に「美しさ」である。そして、「歌物語」という構造も当時の「美」の頂点に歌があったことから説明がつく。「美」という抽象的なものを、「歌」を通して具体化し、人々の共感を呼ぶ。これが「歌物語」というものだ。(C組KY)

例 10：(部分)「物語」の中にはフィクションと実話がある。これは「伊勢物語」を読んでゆく中で多くの人の頭を悩ますものだったと思う。二つのタイプの「物語」があることで、全体の統一性や共通点が見えにくくなるからだ。しかし、そもそも「物語」というのは「作者の見聞または想像を基礎とし、人物・事件について叙述した散文の文学作品(広辞苑)」である。つまり物語は、作者の見聞きした実話や、想像から作られるものであるから、実話もフィクションも物語であり、二つの区別にこだわる必要は無いのだと思う。作者は、第1部、第2部のようなドラマチックに仕上げられたフィクションの豊かさに加え、第3部の実名章段のような実話でこの世のはかなさ、しかしその中に生まれる熱き想いや人々のドラマを描くことで、伊勢物語をより感動的に仕上げた。このように振り返ってみて、「作者」「物語」について考えてゆくと、作者はジャンル(恋愛と非恋愛、フィクションと実話など)を超えて、人々の心に響く優れた歌を集め、豊かな雅や劇的な世界を作り出したのだと思う。とすると、「物語」とは作者にとって人々にそれを伝える手段と言えると同時に、「物語」という中で様々な世界を創りあげてゆく、作者の「想像の舞台」とも言えるだろう。「伊勢物語」の作者は、「物語」の中で年齢や性別や身分などの違う様々な人々の熱き想いを描くことで、時と場所を超えて世代も性別も違う多くの人々の心を動かし魅了し続けているのだと思う。(E組YM)

例9では、「物語」を読み解く上で、主人公である「男」という人物や「昔」という時の設定という枠組から自らを解放し、例10では「物語」の萌芽としての「エピソード」の虚実を問うレベルを超越するという視点を獲得することで、それぞれ「物語る」ことの本質に迫ろうとしている。このように、「最終まとめ」のレポートの段階になると、「男」の悲しみや愛情などの直接的な「伊勢物語」の内容を超えた部分に、論点を見つけ出そうとす

る者が多く見られた。また、「物語」に関しては、  
・連作短編集や、オムニバス編集についての言及  
・「かたる」＝「話す」と「騙す」についての言及  
が多く見られた。  
今回の「伊勢物語」の学習を通して、目標②「『伊勢物語』が作り出され、受け継がれてきた文化や、『物語る』欲求について考えることを通して、古典の意義について理解する」は、概ね達成できた。

### 5. 今後の課題

作者が言いたいことは、自分を愛してくれる人を大切にしなければならない、ということではないだろうか。(略)人間としての理想的な生き方や、大事なことをメッセージとして読者に教えようとしている。

このまとめをした生徒は、学習記録にも「この物語にはどういう教訓が含まれているのか、いまいよく分かりません。」と書いていた。彼が言っていることは、決して間違いではないが、「古典＝教訓話」という縛りから解き放って、もっと豊かで多様な古典の世界を味わわせてやりたい。

4年生後半では、「土佐日記」を扱っている。「伊勢物語」とは違い、紀貫之という個人の具体的な作者意識が明確に現れており、それ故に、言葉遊び的な諧謔表現や、人間性に関する皮肉な見方など多様な内容を含む作品である。これも、ある程度まとまった分量を読むことで作品の多様性に触れて、引き続き「古典を読む態度の獲得」を目指してゆきたい。

(この原稿は、第46回全附属高校部会国語分科会での報告をまとめたものです。)